

「あの日の恐怖」

高崎中学校 三年 榎田 星音

震災から2年半経った今、私はあらためて地震について考えました。

あの東日本大震災から、早いもので約2年半が経ちました。

私は、あの時まだ小学6年生で、もう少しで卒業を迎えるという時期でした。あの大きな地震が起こる2日前も、震度5という地震が起きたのも覚えています。あの時できえとても恐かったのに、二日後にその何倍もの強い地震が来るとは、誰も予測していなかった事でしょう。

あの日、なぜか私達のクラスだけみんなより早く帰りました。私はいつも通りに仲の良い友達と帰っていました。でも、今でも不思議に思うことがあります。それは、私達はなぜか地震の話をしていたということです。二日前の地震から私達はよく地震の話をしていました。それで友達が

「地震雲があるから地震来るかもね。」って、地震の10分前位に言っていました。私達が地震の時に居た場所は、学校の近くのコンビニでした。丁度私の友達のお母さんが車で迎えにきて、友達とバイバイして車に友達が乗ろうとした時、地震がきました。最初はあまり分からない程の揺れだったのに、どんどん大きくなって、立っていることさえできない状況でした。私達は、周りにいた下級生を呼んで、恐怖の中みんなと一緒にかたまっていました。しかし、揺れは大きくなるばかりでした。コンビニからも人が出てきて、ガラスも揺れていました。

私は、あの時いつも見ているものとは全く違う様に見えました。揺れている時、道路は波の様に歪んでいました。地震に気づいていないのか、その道路を走っている車がありました。私達のいる地面はどんどん地割れしていきました。そして、人はみな不安な顔をしていて、私には空が泣いているように見えました。

それから私は、友達の家避難させてもらいました。何回も何回も数え切れない程の余震が私達を襲いました。そして、何より私が心に残っているのは、雪が降ったことです。なぜかその時に降っていた雪は、すごく悲しい雪でした。それから車の中でニュースを見ました。そこにはすさまじい映像が流れていました。それは津波です。私の知っている場所が見た事のない姿になっていました。まさかこんなことになっているとは思いませんでした。私はみんなが無事でいてくれる事、ただそれだけを祈る事しかできませんでした。

私は、夜に友達のお母さんの車に乗せられて、家に帰りました。家は真っ暗で、父と兄がいました。母は仕事場にいると連絡がついたけど、もう一人の兄とは連絡が付きませんでした。小さな灯の中三人で家にあつた白米を食べたのを今でも覚えています。それから何日か経ち兄とも連絡がとれ、無事に家族全員がそろうことができました。

しかし、大変なのはここからでした。水は出ないし、電気は使えないし。いつもは普通の事がほぼ無くなってしまいました。家でいつもひねるとすぐ出る水が、何時間も並んで家まで運んでこなくてははいけない事。電気は使えないから小さな灯でみんな生活していか

なくてはいけない事。大変すぎたけど、私はこの震災からたくさん事を学びました。

その中でも私は、普通の事を普通にできる「ありがたみ」と世界中の「人々との絆」を感じました。そして、何より「家族との絆」を強く感じる事ができました。

このように、東日本大震災は多くの人を傷つけ悲しませたのに変わりはありません。しかし、この震災を通して改めて命の大切さを実感できました。もう二度と起きて欲しくない事だと思います。だから、体験した私達が一生忘れず、後世に残し伝えていきます。

私はあの日の事を絶対に忘れない。